The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	在韓日本人女性が選択する「諦め」の実態 : 語ることを通じて構築される彼女たちのアイデンティティへの考察を通じて
Author(s)	竹村, 博恵
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 71-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88415
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

在韓日本人女性が選択する「諦め」の実態
−語ることを通じて構築される彼女たちのアイデンティティへの考察を通じて−

竹村　博恵

1. はじめに

2021 年 9 月に発表された日韓共同世論調査によると、近年の日韓関係の悪化は日韓両国の国民意識にも影響を及ぼしているという（NHK 2021）。また両国のメディアは日韓の政治的・歴史的問題（以下、「日韓問題」と略）に起因する両国間の対立が生じるたびに自国の立場に沿った内容を報じ、韓国国内では在韓の日本出身者、特に韓国人と結婚した日本人配偶者[1]やその子供たちが日本にルーツを持つ者として肩身の狭い思いをすることになる（及川 2021:132）。例えば及川（2021）は、2019 年に韓国で起こった日本製品不買運動（以下、「不買運動」と略）の際に在韓日本人女性たちが感じていた不安について調査し、当時の日韓関係の悪化は彼女たちにとっても特異な状況であったと指摘する。

在韓日本人女性たちの韓国生活への適応や子供の養育状況に関して調査した先行研究によれば、日韓問題の存在は彼女たちの韓国社会への適応を困難にしているだけでなく、子供の養育においても葛藤を生じさせる要因となっているという（임영언ほか 2013, 박애스더 2017, 박세희 2017）。彼女たちの養育上の葛藤と対処法について調査した박애스더（2017）は、在韓日本人女性の示す特徴として日韓問題に起因する葛藤を子供の教育において経験していること、権力格差のある人物（韓国人の夫、義理の両親など）との意見の衝突を避け自らが諦めることで状況に対処しようとする傾向があることを挙げている。박애스더（2017）の研究は、韓国において社会的マイノリティである日本人女性とマジョリティである韓国人との間で生じる問題や、彼女たちの対処法の特徴を明らかにしたという点において大変示唆的である。ただ、そこでは彼女たちが諦めるという選択を下す際にどのような社会状況や関係性に身を置いているのかまでは言及されていない。このような状況に鑑み、本稿では韓国人男性と国際結婚し韓国で日韓にルーツを持つ子供を育てている日本人女性たちを研究対象とし、夫が 2019 年の不買運動に参加していた日本人女性とその友人による諦めることに関する語りを分析対象として取り上げる。そして、1）彼女たちがナラティブ領域と相互行為の場の両方で自身をどのように位置付けているのか、2）位置付けをもとに実践される彼女たちのアイデンティティとはどのようなものか、という 2 つのリサーチ・クエスチョン（以下、「RQ」と略）を設定し、その結果をもとに語り手が韓国生活の中で諦めるという選択を下す際にどのような社会状況や関係性の中に身を置いているのかについて明らかにすることを目指す。

2. 研究方法の枠組み

本研究では、バトラーの思想に基づきインタビューを「対談」という相互行為の場として位置付け、その中に現れる在韓日本人女性たちの語りを「自分自身に関する説明」として定義する。また Bamberg & Georgakopoulou（2008）の提唱するスモール・ストーリーの枠組みに従い相互行為の場に現れる語りを抽出するとともに、Bamberg（1997, 2004）の提唱したポ

[1] 韓国法務部の報告によれば、現在、韓国国内に在住している日本人結婚移民は 15,480 名（男性 1,631 名、女性 13,849 名）であり、女性が全体の約 9 割を占めている（韓国法務部 2020）。

ジショニング分析の手法を使用し語り手が他の参与者との関わり合いを通じて示す位置付けやアイデンティティの分析・考察を行う。以下では各項目に関して簡単に説明する。

2.1　バトラーの思想

バトラー（1999, 2008, 2012）はインタビューを「対談」（2008: 207）として捉え、インタビュアーの呼びかけに応じてなされるインタビュイーの発言や語りは相互行為の場における語り手の立場を提示するための「自分自身に関する説明」であると述べている。また、発言や語りを行う「私＝主体」を文化的・社会的関係との関わり合いを表す「関係的存在」（2008: 36）として位置付け、そのような主体が形成される過程を「主体化＝服従化（subjection）[2]」（2012:10）という用語を使用して説明している。バトラーは「自分自身に関する説明」を、それが宛てられる他者の存在や「主体化＝服従化」のプロセスの中で影響を与える権力などを内在化したものと述べ、語り手はそれを語るとき必然的に社会評論家にならざるをえないと言う（2012: 16）。さらにバトラーは、語る事を通じて実践されるアイデンティティを関わり合いの中で行われる意味づけの実践と捉え、それは語り手が文化的・社会的に理解可能なアイデンティティを構築するための規則に従って産出した結果であると言う（1999: 257-258）。そして、多様な要因の影響を受けつつ語られる「自分自身に関する説明」の中でこのような「主体化＝服従化」のプロセスやアイデンティティがどのように実践されるのかを分析・考察することは、「私＝主体」がどのような社会状況や関係性の中で構築されているのかを知る契機となると指摘する（2008: 17）。本研究ではバトラーの思想に基づき、インタビューにおいて披露される語りを「自分自身の説明」、その中で表出・構築されるアイデンティティを「関わり合いの中で行われる意味づけの実践」として定義する。そして、「自分自身の説明」が語られる中で見えてくる「主体化＝服従化」のプロセスやアイデンティティについて分析することを通じて、彼女たちが身を置く社会状況や関係性がどのようなものかについて考察する。

2.2　スモール・ストーリー

Bamberg & Georgakopoulou（2008）は日常会話の中で語られるスモール・ストーリーに着目し、それらを進行中の相互行為において局所的なアイデンティティが表出・構築される過程を観察するためのツールとして確立した（イェロガコポロ 2013: 24-26）。スモール・ストーリーの形態は比較的手短で簡素な話になる傾向があり、具体的には進行中の出来事、将来または仮想の出来事、既知の出来事の共有や、語ることのほのめかし、語りの延期、語ることの拒否などの形態が挙げられている(Georgakopoulou 2006, 秦 2013) [3]。本研究では、インタビューの中で在韓日本人女性たちが語る「自分自身の説明」をスモール・ストーリーの枠組みに従い抽出する。そして、語り手が他の参与者との関わり合いのなかで表出・構築する局所的なアイデンティティがどのようなものかについて分析・考察する。

2.3　ポジショニング分析

Bamberg（1997, 2004）は相互行為の場において語られるナラティブを他の参与者と関わり

---

[2] ここでの「主体化＝服従化」とは、外的存在としての権力（「とりわけ諸々の規範の体内化」（バトラー 2012:29））に強制的に服従されることによる主体形成と、そのように形成された主体が内在化した権力に依存することで自らの行為能力（agency）を作り出し維持する状態という 2 種類の方向性を持つ主体化の過程を含んでいる。

[3] 詳細は竹村（2021: 53）参照。

あうための言語実践と捉え、その過程において語り手が「自己を“行う(do)”方法」（イェルガコポロ 2013: 19）を明らかにする為にポジショニング分析を提唱した。Bamberg は、ナラティブを語る事を通じて語り手が構築するポジションを 3 つのレベルに分けて分析する。レベル 1 ではナラティブ領域において他の登場人物との関わり合いの中で示される語り手の自己（ポジショニング・レベル 1)、レベル 2 では相互行為の場において他の参与者との関わり合いの中で示される語り手の自己が分析される（ポジショニング・レベル 2)。レベル 3 では、レベル 1・2 で提示された自己から創造される、その場の文脈から分離可能な語り手の文化的・社会的自己（アイデンティティ）が分析される（ポジショニング・レベル 3）[4]。本研究では、在韓日本人女性たちの「自分自身の説明」を Bamberg の提唱したポジショニング分析に基づき分析する。具体的には、ナラティブ領域と相互行為の場において多様な文化的・社会的要因からの影響を受けつつ語り手がどのように自らを位置付け、それをもとにどのようなアイデンティティを実践しているのかについて分析・考察していく。

3. データ

本稿で使用するデータは、調査者が韓国で実施したインタビュー調査の一部である。実施時期は 2019 年 2 月、8 月、9 月、2020 年 2 月であり、対象者は韓国人男性と恋愛結婚し韓国で日韓にルーツを持つ子どもを育てている日本人女性 28 名（計 30 時間 46 分）である。

表 1　インタビュー参加者の基礎情報

データ番号	参加者	仕事	在韓歴	居住地	実施場所	時間
データ 1-2 (2019/9/10)	ナオ	専業主婦	2 年	仁川	協力者の友人宅	94 分
	ユキ	日本語教師	8 年	仁川		
	調査者	大学院生	7 年	京畿道		

インタビュイーのユキとナオは在韓日本人の母親の集まりで知り合った友人同士であり、調査者とはインタビュー実施時が初対面であった。参与者 3 名には在韓日本人女性であるというだけでなく韓国で日韓にルーツを持つ子供 1 名を育てる母親同士という共通点も存在している。調査は協力者 2 名と調査者 1 名による多人数会話の形態で行われ、ボイスレコーダーとビデオカメラによる録音･録画を同時に実施した。なお参加者の氏名は全て仮名である。

4. 分析

本稿では、データ 1 とデータ 2 に現れたユキとナオのスモール・ストーリーと、それらを取り巻く他の参与者との会話を中心に分析を行っていく。

4.1　データ 1：私は韓国に来た日本人

データ 1 の開始前、ナオは夫について韓国で育った韓国人で愛国心が強いと説明した。そして、現在夫が不買運動に参加していること、日本帰省中にはいつも購入している日本の品物を今回は購入するなと言われたことを話した。それを聞いた調査者とユキは大変驚き、調

[4] 詳細は竹村（2021: 53）参照。

査者はそんな夫を見てどんな気持ちになるのかとナオに質問する。データ 1 では、それに対するナオの回答がスモール・ストーリーとともに話される。ナオが話したスモール・ストーリーは、1 つ目が S1（76-87）、2 つ目が S2（93-114）、3 つ目が S3（107-109）である。

＜データ 1：私は韓国に来た日本人＞

65. 調査者：ああそうっそういう旦那さんの姿を見るとどっど::ん
66. 　　：な::(.)気持ちがします?
67. ナオ　：((視線を下に向け))う::::::::ん
68. 　　：(2)なんか私:は:(1)韓国に来た[(..)日本人なので:
69. 　　：やっぱりここ::に
70. ユキ　：　　[((大きく数回頷く))
71. ナオ　：(..)に慣れなきゃいけないなっ(.)[ていうふうに(..)思
72. 　　：ってるので::
73. 調査者：　　[((頷く))
74. ユキ　：((何度も頷く))
75. ナオ　：(2)ん::だから(..)旦那がそういうふうに(..)いうゆうの
76. 　　：も嫌ですけども::でも::その家族に対してちゃんと::
77. 　　：(..)あの::親切っていうか(.)[まあ良くしてくれるの
78. 　　：で::
79. ユキ　：　　[((何度も頷く))
80. 調査者：((頷く))
81. ナオ　：母と父親の誕生日の時にはいっつも(..)日本に来
82. 　　：てくれたりとか::
83. ユキ　：((頷く))
84. 調査者：((何度も頷く))
85. ナオ　：あの色々(.)連絡もしっ(.)しょっちゅう
86. ユキ　：((ナオを見て何度も頷く))
87. ナオ　：私が知らないところで¥-してたりとか-¥　<S1>
88. ユキ　：((頷く))
89. ナオ　：しっそっそういうの部分も知っているので::
90. 調査者：((頷く))
91. ナオ　：(.)まあ(..)いいところも知ってるし::
92. ユキ　：((頷く))
93. ナオ　：まあ今そういうふうに悪いっ(.)悪いっていうかま
94. 　　：あ::(..)ねえ　<S2>
95. ユキ　：((頷く))
96. ナオ　：いっそういう日本に対して
97. ユキ　：[((頷く))
98. 調査者：[((頷く))
99. ナオ　：いっ(..)悪いことも::((唾を飲んで))良くないこともゆ
100. 　　：っ(..)その(.)私にいうっていうよりかはテレビにゆっ
101. 　　：たりとか(.)[1 ひとご[2 独り言のようにいうんで:あん
102. 　　：まり[3(..)ん:::
103. ユキ　：　　[1((頷く))
104. 調査者：　　[2 うん::
105. ユキ　：　[3((何度も頷きながら))ん:
106. ナオ　：嫌ですけども::(.)まあしょうがないかな::って(..)私
107. 　　：はここにいる限り:(.)日本にいってそういうことされ
108. 　　：たらちょっといっいっ言っちゃうかもしれないですけ
109. 　　：ど　<S3>
110. 調査者：ほお::::[:::::
111. ユキ　：　　[((調査者に視線をやりつつ小さく頷く))
112. ナオ　：　　[私はここにきた:身なので::(. .)うん::¥-しょう
113. 　　：がないのかなっ-¥て私は:思っちゃいますね((何度
114. 　　：も頷く))　<S2>
115. 調査者：ん:::じゃあもし旦那さんが日本に来て::((ナオうな
116. 　　：ずく))[日本で暮らしていたら::
117. ナオ　：　　[うん((何度も頷く))うんうん
118. 調査者：その同じ行動に対して::
119. 　　：[それは::って言えるってこと[ですか?
120. ナオ　：[うん::　　[((頷く))うん:そうですね
121. 調査者：もっ場所?
122. ナオ　：((首を傾げ))¥-場所でっ-¥@@うん((ユキの方を見
123. 　　：る))

まず、スモール・ストーリーにおけるナオの位置付け（ポジショニング・レベル 1）について述べる。ナオはデータ 1 開始前、夫について愛国心が強い韓国人で不買運動に参加し妻であるナオにも日本製品を買うなと言うと説明していた。そして、その後語られた S1 ではナオの両親に対する夫の対応が「良くしてくれる」（77）、「来てくれる」（81,82）などの恩恵授受表現とともに描かれ、日本人の両親に良くしてくれる韓国人の夫を持つ私（レベル 1）というナオの位置付けと夫への感謝が示される。S2 では不買運動が起こっている「今」（93）日本に対し否定的な発言をする夫と、それを嫌だと感じつつも受け止めようとするナオが描写され、韓国に来た身だから夫が日本を悪く言っても受け止めるしかない私（レベル 1）というナオの位置付けが提示される。S3 は仮定の状況として S2 の中で語られ、ナオは日本在住なら夫に何か意見するかもしれないと述べ、日本で暮らしていたら夫に意見できるかもしれない私（レベル 1）という位置付けを示す。ここでは韓国では実行不可能なことが日本では可能になるナオの位置付けが示される。S2-S3 では、自身が嫌だと感じる日本批判も直接自分に向け

ないならば仕方がないことと諦めようと試みるナオの様子や、その際に自身を「ここに来た身」（112）として位置付けることで自身の行為を裏付けようとする姿が見られた。ここからは、自分に直接向けるのではないならば愛国心が強く不買運動に参加する夫が日本批判を行っても仕方がない、自分はそのような夫の行為に対し韓国にいる限り意見することはできない、しかし日本でならば意見できるかもしれないとナオが感じていることが窺えた。

次に、相互行為の場におけるナオの位置付け（ポジショニング・レベル 2）について述べる。データ 1 の開始前、ナオの夫の言動を聞いた調査者とユキは大変驚いた様子を示す。そこでは韓国人の夫を持つ在韓日本人女性という 3 人の位置付けが、不買運動に参加しそれを妻にも強要する韓国人の夫を持つナオとそうでない調査者とユキの間で線引きされた状態になる。夫の言動に対する感情を尋ねられたナオは、68 行目で自身を韓国に来た日本人の私（レベル 2）と位置付け「ここ」（69）に「慣れなきゃいけない」（71）と思っていると話す。ナオの発言に調査者とユキは頷き受け入れる様子を示し（70,73,74）、ここでは 3 人が韓国に来た日本人の私（たち）（レベル 2）、韓国に慣れないといけない私（たち）（レベル 2）という位置付けを共有する様子が見られた。その後ナオは夫の言動に対して「嫌です」（76）と評価付けするが、その直後に接続詞「けども[5]」（76）を挿入し今度は夫が家族に対して「良くしてくれる」（77）と発言する。さらに逆説の接続詞「でも」につづけて語られた S1 では、日本に対し批判的な言動をするけれども日本人の両親に親切にする夫の姿勢に対し「いいところ」（91）という肯定的な評価付けを行う。ここでは、単に妻の両親を大切にしてくれることに対す感謝だけでなく、前述した背景をもつ夫が日本人の両親に良くしてくれることに対する感謝も内包されている可能性が窺える。同様の流れは S2 でも見られ、その際にナオは日本に対する「悪い」、「良くない」（99）発言をテレビに対して独り言のように行う夫に対し「嫌です」（106）と評価付けする。しかし、直後に「けども」（106）を挿入し、それを自身に向けて発するわけでないので「しょうがないかなって」（106）と仕方なく受け止める様子を見せる。その後ナオは「私はここにいる限り」（106-107）韓国に来た日本人であると述べ、S3 では状況が逆転するならば意見できるかもしれないと話す。それに対し調査者は「ほお::」（110）と同意とは異なる反応を示す。それを受け再度ナオは「私はここにきた身なのでしょうがないのかな」（112-113）と発言するが、ここでは「って私は思っちゃいます」（113）と補助動詞「−てしまう」[6]を使用し自分の意志ではなく状況がそう思わせているという姿勢をとる（一色 2011）。また、ナオはしょうがないという自身の評価を提示する際、常に語尾に「かな[7]」をつけて表現しており、その言い方からはナオがしょうがないと心の底から納得して思っていない可能性や夫の言動に対し理解できない納得いかないという思いを抱いている可能性が示唆される。これらの点を総合すると、上記のやり取りの中でナオが韓国に来た日本人なので韓国人の夫が日本に対して否定的な言動をしても受け止めるしかない私（レベル 2）という位置付けを他の参与者に対し提示しようと試みていることがわかる。それに対し調査者は、状況が反対であれば夫に意見できるのかと確認する（115-119）。するとナオは「そうですね」（120）と述べ、日本にいれば夫に意見できる私（レベル 2）という位置付けを示す。それを

[5] デジタル大辞泉によれば、接続詞「けども」は「前に述べた事柄と相反する内容を導く語」である。

[6] 補助動詞「−ちゃう」は「−てしまう」が音韻縮約を起こした形式であり日常的で私的な場面で使用されやすく、動作主体によるコントロールが不可能な状態で行為が行われることを表す働きがある（一色 2011: 209, 216-217）。

[7] デジタル大辞泉によれば、「かな」には、① 念を押したり、心配したりする気持ちを込めた疑問の意を表す、② 理解できない、納得いかないという意を表すといった意味がある。

受け調査者は「場所?」（121）と驚いた様子を見せるが、ナオは笑いつつ「場所で」（122）と返答する。2 人のやりとりからは、夫の言動を仕方がないと諦め受け止める要因が韓国に来た日本人という自身の位置付けにあることを調査者に再度主張しようとするナオの姿勢が観察された。ただし、データ開始前に示された夫に対する彼女の説明や、場所によって夫に意見できたりできなかったりするという立場の変化からは、彼女の示す韓国に来た日本人という位置付けが日韓の間の歴史的背景や日韓問題を媒介した日本人と韓国人の立ち位置だけでなく、社会構成員としてのマイノリティとマジョリティとしての異なりなど多様な要因が複雑に重なる中で行われている可能性が窺えた。

最後に、ナオが実践する文化的・社会的自己（ポジショニング・レベル 3）について述べる。データ 1 の中でナオは、日本に対し否定的な感情を持ちながらも日本人の両親に良くしてくれる夫に感謝する様子を示したり、日本批判をする夫は嫌だが自分に向けるのでなければ仕方がないと話したりしていた。その際には、そう感じる理由として「韓国に来た日本人」（68）、「私はここにきた身」（112）という自身の位置付けを繰り返し提示していた。しかし同時に、ナオの夫への評価の端々からは彼女が夫の言動に納得していない可能性も見受けられ、場所が反対であれば状況が変化する可能性も示唆されていた。以上の点から、データ 1 ではナオがマジョリティの言動が不快でも慣れなければならないマイノリティの私（レベル 3）という文化的・社会的自己を構築していることが示された。しかしながら、データ 1 でのナオの発言からは、韓国社会における日本人と韓国人という立ち位置が、社会の構成員としてのマイノリティとマジョリティという枠組みだけでなく、日韓問題を媒介した日本人と韓国人という枠組みとも関連している可能性が見受けられた。そこからは、ナオが社会的マイノリティはマジョリティに意見できない、韓国に来た日本人は韓国人の日本批判に慣れて受け止めるしかないという規範意識を所持している可能性が示唆されるとともに、その規範を反復しながら主体化を行いつつも戸惑いや迷いを感じている彼女の内情が明らかとなった。

4.2　データ 2：郷に入れば郷に従え的な

データ 2 はデータ 1 が終了した直後から始まり、意見のわれた調査者とナオに対しユキが自分の立場を述べていく。ここではユキによって 3 つ（S4:122-123, S5:130-131, S7:148）、ナオによって 1 つ（S6:141-145）のスモール・ストーリーが語られる。

＜データ 2：郷に入れば郷に従え的な＞

109. ユキ　:えっでもっ(.)にほっ外国人(..)っていうあれはあ
110.　　:るんっかあ::んこく((韓国))に来た日本人っていう
111.　　:のは確かに
112. ナオ　:うん::
113. 調査者:(..)((ユキを見て微かに頷き))ああ[::
114. ユキ　:　　[ちょっとあるか
115.　　:も何か違う(1)なんか受け入れようっていうのが広
116.　　:くなる気がする
117. ナオ　:((大きく頷いて))う:ん
118. 調査者:((ユキを見て))ああ::
119. ユキ　:なんか郷に入れば[郷に従え的な::のが::
120. ナオ　:　　[((何度も頷きつつ))そうそうそ
121.　　:うそうそうですね
122. ユキ　:(1)そうじゃないとうまくまわらない[っていうか自 <S4>
123.　　:分が疲れちゃうから[::とか:: <S4>
124. ナオ　:　　[((頷きつつ))え
125.　　:えええ
126. 調査者:　　[ああ::
127.　　:自分が疲れる(.)((頷きつつ))ああああああ
128. ユキ　:ていうのは::
129. 調査者:うまくまわらない(..)((頷きつつも眉を寄せ))うん:::
130. ユキ　:例えばここっおんなじように日本の姿でここでや
131.　　:ると(2)えらい几帳面な的な[(..)部分とか? <S5>
132. 調査者:　　((頷きつつ))[うん::::::
133. ナオ　:[((頷く))うん:((何度も頷く))
134. ユキ　:[そういうちっちゃいもうっ(.)いったらそういうよう
135.　　:な(.)感覚なのかな?って
136. 調査者:((ユキを見て頷く))

137. ナオ :((大きく頷き))うん[::
138. ユキ : [思うなんかわかる気がするな
139. :それは(.)[って
140. ナオ : [((頷く))
141. :なんか色々と(.)諦めてますね
142. :[日本ではこういう風にしてるけど:[こっちに来て
143. ユキ :[((ナオを見て小刻みに頷き聞く))[((頷き))うん
144. ナオ :やっぱここに(.)生活に慣れなきゃ(.)
145. :[っていうふ:うに[思ってるんで <S6>
146. ユキ :[((何度も頷く))
147. 調査者: [((頷きつつ))う::んうんうん
148. ユキ :これが普通だからねって(.) <S7>
149. :例えば離乳食とかでも(.)あげるものの順番とか

まず、スモール・ストーリーの中におけるユキとナオの位置付け（ポジショニング・レベル 1 ）について述べる。S4 でユキは韓国のやり方を受け入れないと物事がうまく回らず疲れてしまう状況を描写し、韓国のやり方を受け入れないと円滑な韓国生活が送れない私（レベル 1）という位置付けを示す。S5 では韓国で日本のやり方でやると几帳面と見られる状況を例示し、韓国で日本のやり方を実践すると違和感を抱かれる私（レベル 1）という位置付けを示す。S7 では、韓国のやり方を許容する様子を描写し、韓国では韓国のやり方を普通として受け入れる私（レベル 1）という位置付けを提示する。次にナオは、S6 で韓国のやり方が日本と違うことを認識しつつも生活に慣れるため色々な事を諦める自身の様子を描写し、韓国や韓国での生活に慣れる為に色々と諦めている私（レベル 1）という位置付けを示していた。

次に、相互行為の場におけるユキとナオの位置付け（ポジショニング・レベル 2）について述べる。データ 2 の冒頭でユキは、自身を「外国人」（109）と位置付けた後に「韓国に来た日本人」（110）と言い直している。ここでは、データ 1 でナオによって提示された韓国に来た日本人という位置付けを、ユキが韓国で暮らす外国人として認識している可能性が見受けられる。しかしここでナオは、ユキの発言に意見する様子は見せず同意を示しただけであった（112）。続けてユキは韓国に来た日本人という感覚が自身の中にも「ちょっとあるかも」（114-115）と述べ、「受け入れようっていうのが広くなる気がする」（115-116）と発言する。それに対しナオは大きく頷き（117）、ユキはその感覚を「郷に入れば郷に従え的な」（119）と諺を引用して説明する。ナオはユキが諺をすべて言い終える前に何度も頷きながら強く同意を示しており（120-121）、ここでは韓国に来たのだから処世のために韓国のやり方に従おうとする私（たち）（レベル 2）という位置付けが 2 人の間で共有される様子が観察された。その後ユキは S4 を語ることでそのような考えを支持する理由を提示する。それを受けナオは同意を（124-125）示すが、調査者は複雑な表情を見せる（129）。またユキは S5 で日本のやり方にこだわった際の具体例を示し、「そういうちっちゃい」、「そういうような感覚なのかな?」（134-135）と述べる。135 行目のユキの発言の語尾は疑問形であり、同様の形態が 131 行目でも見受けられた。ここからは、ユキがスモール・ストーリーを挿入しつつ自身の感覚がナオと同じなのか何度も確認しようとしていることがわかる。それに対し調査者とナオは頷きつつ同意を示しており（132,133,136,137）、それを受けユキは「思うなんかわかる気がするなそれはって」（138-139）と述べ、ここでは 3 人の間で「郷に入れば郷に従え」（119）の精神で韓国生活を送る私（たち）（レベル 2）という位置付けが共有されていた。その後 S6 で色々と諦めるナオの姿が描かれると他の 2 人がそれに同意を示しており（146,147）、ここでも 3 人が韓国や韓国生活に慣れるためには日本のやり方を諦める私（たち）（レベル 2）という位置付けを共有している様子が見られた。しかし、続く S7 では「これが普通だからね」（148）というユキの声が提示され、その直後に離乳食の話題が取り上げられる。ここからは、韓国に来た日本人という位置付けからユキが受け入れるのが離乳食の与え方のような生活習慣レベ

ルの異なりであることが理解できるとともに、彼女が S4 で例示した状況やそれに対する評価付けの内容（134-135）がそのような「ちっちゃい」（134）点に関し許容範囲が広くなる「感覚」（135）ということを指していたことがわかる。対するナオの場合は、同様の位置付けから彼女が受け止める事例として夫の日本に対する否定的な言動が挙げられていた。また、それは他の 2 人には強い驚きを感じる普通とは認識できない事例であった。以上の点から、韓国や韓国での生活に慣れるため日本のやり方を諦めるという選択を 3 人が共通して行っていること、ただし諦めることを試みる事象には 3 人の間で違いがあることが明らかになった。

最後に、ユキとナオが実践する文化的・社会的自己（ポジショニング・レベル 3）について述べる。データ 2 では、韓国に来た日本人として郷に入っては郷に従えの精神で受け入れようとする事象がユキとナオの間で異なっている可能性が見受けられた。また、2 人がマイノリティはホスト社会のやり方に従う方が上手く生きていけるという認識を共通して所持していることが示された。さらにそのような認識に従い様々な事を諦めながら韓国で生活しようとする姿勢からは、マイノリティとして様々なことを諦める私（たち）（レベル 3）という文化的・社会的自己を 2 人が構築していることが明らかになった。しかしながら、本人も何度も確認しているように、ユキは自身の考える韓国に来た日本人という位置付けが内包する意味合いがデータ 1 で示されたナオのものと異なっている可能性を感じていた。ただ、データ 2 の中でナオは、自分達の境遇を韓国社会の構成員の中でマイノリティである外国人として提示するユキに同調する様子を見せている。ここからはユキが感じていた相違をナオは認識できておらず、韓国に来た外国人という位置付けとデータ 1 で彼女の示した韓国に来た日本人という位置付けがナオの中で明確に区別されていない可能性が示唆された。

5. 考察

以下では本稿で設けた 2 つの RQ への回答と、その結果に基づく総合的な考察について述べる。まず RQ1 への回答として、データ 1 では韓国に来た日本人の私、韓国に慣れなければいけない私、韓国に来た身だから夫の日本に対する不快な言動も受け止めるしかない私といった位置付けが見られた。そこからは、夫の日本批判を受け止めようとする要因として韓国に来た日本人という位置付けが提示されていることがわかった。データ 2 では、韓国生活に慣れるために韓国のやり方を受け入れる私や、様々な事を諦める私といった位置付けが見られ、円滑な韓国生活を送るために生活習慣レベルにおいて韓国のやり方を受け入れ生活していこうとする彼女たちの姿勢が窺えた。このような彼女たちの発言からは、どのような位置付けや状況から何を諦めるかに関しては個人差が存在していることが明らかとなった。

次に RQ2 への回答として、データ 1 ではマジョリティの言動が不快でも慣れなければならないマイノリティの私、データ 2 ではマイノリティとして様々なことを諦める私というアイデンティティがそれぞれ構築されていた。そこからは、マイノリティはホスト社会やマジョリティのやり方に従うべきであるという規範意識を彼女たちが所持していること、またそのような規範に従い自らを主体化する際には郷に入っては郷に従えという諺を使用し自らが服従する規範を裏付けようとしていることがわかった。しかし、ナオの事例からは主体化のプロセスにおいて彼女がそのような規範を反復することに迷いを感じている様子も観察された。

以上の点から総合的に言えることは、彼女たちが様々な事を諦めて韓国や韓国人のやり方に適応しようとする際に、何をどのような状況の中で諦めようとしているのかを注視するこ

との重要性である。本稿のデータにおいても、日韓問題に起因する夫の日本批判や政治的思想の強要など自身が嫌だと感じる事象を仕方がないことして諦め受け止めようする様子と、日韓の生活習慣レベルの文化差に関して本人が多様な経験をする中で日本のやり方を諦め韓国のやり方を受容する様子とが同じ諦める事象として扱われていた。ここからは、自ら諦めることにより状況に対処するという姿勢は同じであっても、韓国や韓国人に適応していくために戦略的に諦めるケースもあれば、諦めて相手のやり方を受け入れるもののその背後では自身が感じる苦痛や迷いに蓋をしているケースも存在しているということがわかる。本稿で示されたこのような結果からは、諦めるという対処法で処理される事象が日韓の生活習慣レベルの文化差に対するものから精神的な苦痛を感じる出来事まで含む広い範囲に及んでいるという実態が明らかになった。また、彼女たちが諦める私を主体化させる際、マイノリティはマジョリティやホスト社会のやり方や意見を受け入れる方がよいという規範意識を反復し、それを裏付けるために郷に入っては郷に従えという諺を使用する様子が見られた。しかしながら、それらの規範の反復が韓国で円滑な日常生活を送るために諦める私という語り手の主体化を促す一方で、語り手自身に戸惑いを生じさせる作業でもあることがわかった。本稿で示されたデータからは、在韓日本人女性たちが韓国人の夫との関係性において、夫（男性）と妻（女性）以外にも、外国人と韓国人という社会構成員としてのマイノリティとマジョリティの枠組み、そして日韓問題に関連した出来事を媒介した日本人（加害国出身者）と韓国人（被害国出身者）という枠組み、などが複雑に重なり合った中で互いを位置付けつつ生活している実態が示唆された。そのような状況下で暮らす彼女たちにとって諦めるという選択肢の使用は、相手との関係性を複雑にする個人的な感情や個人では対処が難しい問題を棚上げし目の前の生活を優先して回していく上で確かに有効な処世術の一つかもしれない。しかし、彼女たちが諦めることで本来ならば対処する必要がある自身の精神的な苦痛や迷いをなかったことにしている状況を看過することは、結果的には彼女たちが韓国や韓国生活に適応していく過程で遭遇する困難を見逃すことにつながるのではないだろうか。

6. まとめ

本稿では在韓日本人女性たちが語る事を通じて実践するアイデンティティへの考察を通じて、彼女たちが諦めるという対処法をどのような社会状況や関係性の中で選択しているのかという実態を明らかにした。本稿の結果からは、諦めるという対処法が時として彼女たち自身もうまく言語化できない精神的苦痛や迷いをなかったことにしてしまう危険性を持っていることが示唆された。また、彼女たちが子供の養育上の葛藤だけでなく自身と夫の関係においても自分の中の疑問や迷いを声に出して訴えることが難しい状況に時として身を置いていること、また彼女たちの所持するマイノリティはマジョリティのやり方や意見を受け入れるべきであるといった規範意識がその際に影響を与えていることも明らかになった。本稿で示された結果は、韓国で彼女たちが引き受けている複雑な位置付けと諦めるという対処法の関連性を示すとともに、彼女たちが韓国で安定した生活を送るためにどのような心理・社会的支援が必要かについて思案するための一助になったと考える。

参考文献

임영언 & 이화정. (2013). 한국거주 일본인의 문화적응 모형과 다문화적 수용태도 연구（韓

国居住日本人の文化適応モデルと多文化的受容態度に関する研究）, *평화학연구*, 14(4), 187-205.
박애스더. (2017). 연애결혼한 일본인 이주여성의 자녀 양육 갈등과 대처에 관한 질적 연구（恋愛結婚をした日本人移住女性の子供の養育における葛藤と対処についての質的研究）, *일본언어문화*, 38, 281-302.
박세희. (2017). 일본인 결혼이주자의 자녀양육을 둘러싼 사회문화적 갈등에 관한 질적 연구（日本人結婚移住者の子供の養育を取り巻く社会文化的葛藤に関する質的研究）, *일본어교육연구*, 41, 61-78.

Bamberg, Michael (1997). Positioning Between Structure and Performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1/4), 335-342.
Bamberg, Michael (2004). Form and Functions of 'Slut Bashing' in Male Identity Constructions in 15-Year-Olds. *Human Development*, 47(6), 331-353.
Bamberg, Michael, & Georgakopoulou, Alexandra (2008). Small Stories as a New Perspective in Narrative and Identity Analysis. *Text & Talk*, 28(3), 377-396.
バトラー・ジュディス (1999). ジェンダー・トラブル −フェミニズムとアイデンティティの撹乱− 竹村和子（訳） 青土社.
バトラー・ジュディス (2008). 自分自身を説明すること −倫理的暴力の批判− 佐藤嘉幸・清水知子（訳） 月曜社
バトラー・ジュディス (2012). 戦争の枠組み −生はいつ嘆きうるものであるのか− 清水晶子（訳） 筑摩書房
Georgakopoulou, Alexandra. (2006). Thinking big with small stories in narrative and identity analysis, Bamberg, Michael (ed. with introd.), *Narrative-State of the Art*, pp.145-154, Amsterdam, Netherlands; John Benjamins Publishing Company.
イェルガコポロ・アレクサンドラ (2013). ナラティブ分析 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線 -人は語ることで何をなすのか- pp.1-42 ひつじ書房
秦かおり (2013). 「なんとなく合意」の舞台裏 在英日本人女性のインタビュー・ナラティブに見る規範意識の表出と交渉のストラテジー 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線 -人は語ることで何をなすのか- pp.247-271 ひつじ書房
一色舞子 (2011). 日本語の補助動詞「−てしまう」の文法化 −主観化、間主観化を中心に− *일본연구*, 15, 201-221.
韓国法務部 (2020). "国籍(地域)別在留外国人現況", 韓国法務部（online）, 21 August, https://kosis.kr/statisticsList/statisticsListIndex.do?menuId=M_01_01&vwcd=MT_ZTITLE&parmTabId=M_01_01&outLink=Y&parentId=A.1;A_9.2;#content-group, 2021/3/20 アクセス.
NHK (2021). "日韓関係冷え込み 国民意識に影落とす 民間団体世論調査", NHK 国際ニュース(online), 8 November, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210928/k10013280921000.html, 2022/2/2 アクセス.
及川ひろ絵 (2021). 在韓日本人妻の韓日関係を取り巻く不安に関する事例研究 −2019 年の状況を中心に− *일본연구*, 54, 131-168.
竹村博恵 (2021). 日韓問題と共存する女性たちのアイデンティティ：韓国での不買運動に関する語りの分析を通して *言語文化共同研究プロジェクト(2020)*, 51-60.

トランスクリプト記号

(.) /(..)	0.2 / 0.5 秒以下の短いポーズ	(数字)	(数字)秒の短いポーズ	(( ))	状況説明
[	発話の重複の開始箇所	_____	強調的に発音される箇所	@	笑い(個数は長さ)
?	疑問形の上昇イントネーション	:	音の引き伸ばし(個数は長さ)	¥--¥	笑いながらの発話(¥¥の間)